

全学共通科目「書物との出会い」の効果検証

西本 佳代 (大学教育基盤センター准教授)

佐藤 慶太 (大学教育基盤センター准教授)

時岡 晴美 (教育学部教授)

1. はじめに

本稿は、全学共通科目として開講されている「書物との出会い」(学問基礎科目、「学問への扉」の枠で開講)の受講生、教員を対象に行ったアンケート調査の結果をまとめ、結果について分析を行ったものである。「書物との出会い」はさまざまな専門分野の教員たちが5人ないしは6人のチームを組み、書物がもたらす新たな視点、驚きや感激を伝えることを目的として開設されたオムニバス形式の授業であり、2016年度からスタートした。学生は、インターネットなどで多くの情報に接しているが、そのほとんどが断片的である。大学では、それらの情報を整理する視点、問題を発見し、解決策を探究する力が必要であるが、高校までの学習は暗記中心で、必ずしもそういった視点・力が身につけていない。そういった力の育成の第一歩として、「書物との出会い」は位置づけられている。

主な特徴は、①担当教員が1人につき3作品の課題図書を紹介し、学生が授業期間中に3冊読んでレポートを書く、②教員が紹介した図書が6冊ずつ、図書館に配架される、③知的読書の習慣を身につけるきっかけとして、夏休みを読書の期間とし、最終レポートを9月末に提出してもらう。これが前期の成績交付期間を過ぎるため、成績交付を後期の授業のそれに合わせて行う、というところである。科目立ち上げの経緯や実施の詳細については、斉藤ほか(2018)にまとめられているので、そちらを参照されたい。

この授業に対する学生の反応については、斉藤ほか(2018)でもまとめているが、それは授業終了直後のアンケートに基づくものであった。「書物との出会い」が、「読書」という習慣的な営みに関わるものである限りにおいて、長期的な視点から受講生への影響を調べる必要もある。また授業改善や継続的な開講のための体制確保のためには教員と学生の意識のずれや、教員にとっての意義や負担等について調べておく必要があるだろう。本稿は、このような趣旨のもとに行われた学生対象の追跡アンケート調査、教員へのアンケート調査に基づいている。なおこの調査は、第三期中期計画・中期目標においてもとめられる授業の検証が、1つの動因となっていることも、付け加えておく。

2. 受講生を対象としたアンケート調査の結果

2-1. 調査の方法

過去に「書物との出会い」を受講した学生の意識を確認するため、アンケート調査を実施した。アンケートは、Google フォームを用いて作成し、受講した学生の大学 E-mail ア

ドレス宛に、回答用 URL を送付した。調査期間は、2019 年の 7 月 3 日から 31 日である。2016 年度から 2018 年度の間、「近代ヨーロッパと現代」「男と女」「視ることと読むこと（映像と書物）」のいずれかの授業を履修した 376 名の学生を対象として実施し、85 名から回答が得られた。回収率は 22.6% だった。

2-2. 調査協力者の属性

調査結果を確認する前に、まずは調査協力者の属性について確認したい。表 1 は調査協力者の属性を示したものである。履修した年度については、2016 年度が約 2 割、2017 年度が約 4 割、2018 年度が約 3 割となっていた。履修した授業は、「男と女」が約 5 割と最も多く、「視ることと読むこと（映像と書物）」が約 4 割、「近代ヨーロッパと現代」が約 1 割と続く。所属学部については、教育学部が約 3 割、法学部・医学部・工学部が約 2 割、経済学部・農学部が約 1 割となっていた。性別については、女性が約 6 割と多数を占め、男性は約 3 割にとどまっていた。

表 1 調査協力者の属性

履修した年度	2016年度	2017年度	2018年度	合計			
	22.4	44.7	32.9	100.0(85)			
履修した授業	近代ヨーロッパと現代	男と女	視ることと読むこと（映像と書物）	合計			
	12.9	48.2	38.8	100.0(85)			
学部	教育	法	経済	医	工	農	合計
	30.6	15.3	7.1	21.2	15.3	10.6	100.0(85)
性別	男	女	その他／ 答えたくない	合計			
	34.1	62.4	3.5	100.0(85)			

注：数値は%。()内は実数。

工学部は 2018 年度より創造工学部となったが、一括して「工」と記載している。

2-3. 授業の満足度

本節では、過去に「書物との出会い」を受講した学生を対象としたアンケート調査の結果から、授業の満足度、授業の難易度、授業の影響、授業の継続に対する意見、問題点と解決策、の 5 点を報告する。

まず、「書物との出会い」の授業満足度についてみてみたい。「書物との出会い」の授業満足度について、「非常に満足した」から「非常に不満だった」の 5 段階の選択肢を用意し、選択肢の中から 1 つを選んでもらった。図 1 は、その結果を示したものである。この結果からは、受講して数年が経過した状態でも、本授業の満足度が高いことがうかがえた。「非常に満足した」23.5%、「満足した」48.2%となっており、満足したと回答する者が 7 割を超えていることがわかる。

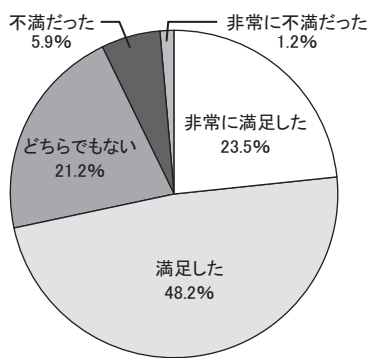


図1 授業の満足度

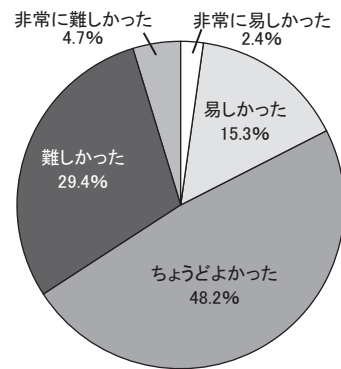


図2 授業の難易度

2-4. 授業の難易度

では、本授業の難易度はどのように考えられているのだろうか、続いてその点について確認したい。図2は、本授業の難易度について聞いた結果を示したものである。こちらは「非常に易しかった」から「非常に難しかった」の5段階の選択肢を用意し、選択肢の中から1つを選んでもらった。この結果からは、「ちょうどよかった」と回答した者が約5割と最も多くなっているものの、「難しかった」と回答する者が約3割、「易しかった」と回答する者が約2割いることがわかる。

「書物との出会い」では、「近代ヨーロッパと現代」「男と女」「視ることと読むこと（映像と書物）」各授業の難易度を分けて設定している。つまり、「近代ヨーロッパと現代」から「視ることと読むこと（映像と書物）」になるにつれて、授業で扱う書物は容易になる。そのため、授業によって、学生の感じる難易度にばらつきが生じることも予想されたが、本アンケート調査では、いずれの授業についても、「難しかった」「ちょうどよかった」「易しかった」と回答する者が含まれていた。つまり、「近代ヨーロッパと現代」を受講した学生が「難しかった」、「視ることと読むこと（映像と書物）」を受講した学生が「易しかった」と回答する傾向にあるわけではないことがうかがえた。学生の読書のレベルにあった授業を開講する意味を改めて考えさせる結果である。

2-5. 授業の影響

続く図3は、授業が及ぼした影響について聞いた結果を示したものである。本授業は、到達目標として、「①改めて書物と出会い、その経験について述べることができる。②書物の読解を通じて、いくつかのもの見方、探求の仕方を学び、実際にそれらを活用できるようになる。③知的読書を習慣とするための第一歩として、課題図書を読み、それについて自分の考えをまとめることができる。」の3点を掲げている。この到達目標を参考にしながら、授業の影響について聞くことを目的に、「書物の面白さを知った」「書物を読むようになった」「書物に関心を持つようになった」「書店に行く機会が増えた」「知的読書を習慣とするきっかけをつかんだ」「多様な書物を読むようになった」「書物を通して新しい世

界が広がった」「影響がなかった」という8つの項目を用意した。なお、複数選択可とし、該当する項目にチェックを入れてもらった。

この結果からは、書物を通して新しい世界に触れた、書物そのものに関心を持つようになった、という変化のあった学生が多いことがわかる。「書物を通して新しい世界が広がった」と「書物に関心を持つようになった」は約4割の学生が該当している。また、「書物の面白さを知った」「多様な書物を読むようになった」の該当者も約3割にのぼる。こうした意味において、授業を開設した当初想定していた「書物との出会い」の授業目標の一部は達成できたと考えられる。

ただし、「知的読書を習慣とするきっかけをつかんだ」は約2割にとどまる。斉藤ほか(2018)でも指摘した通り、本授業では、一年生が書物と出会う第一歩をサポートできても、更に進んで知的読書を習慣化するまで、直接に到達させるのは難しいことがうかがえる。今後も時間経過をはかりながら継続して捉える必要があるのではないだろうか。

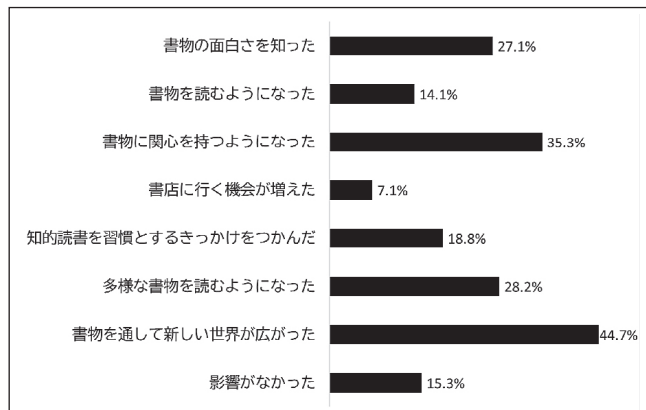


図3 授業の影響

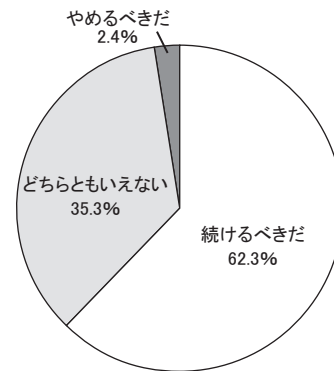


図4 授業の継続に対する意見

2-6. 授業の継続に対する意見

「授業の影響」の検討からは、書物を通して新しい世界に触れた、書物そのものに関心を持つようになった、という変化のあった学生が多いことがわかった。では、授業の継続についてはどのような意見が得られたのか。続く図4は、授業の継続に対する意見を聞いた結果を示したものである。選択肢は「続けるべきだ」「どちらともいえない」「やめるべきだ」の3つを用意し、選択肢の中から1つを選んでもらった。

この結果からは、授業を継続すべきだと考える者が約6割にのぼることが確認できる。「続けるべきだ」62.3%、「どちらともいえない」35.3%、「やめるべきだ」2.4%、となっていた。授業担当者としては、今後も授業を継続するとともに、更なる充実に向けて改善を図っていきたいと考える。

2-7. 問題点と解決策

本アンケートでは、授業の問題点と解決策についても、自由記述の形式で聞いている。多様な意見が寄せられたが、ここでは、引き続き検討が必要とされる3つの意見について取り上げたい。

第一は、成績評価の時期、タイミングについてである。本授業では、前期に15回の授業を行った後、夏季休暇中に課題図書レポートを提出してもらい、後期授業と同じタイミングで成績をだしている。そのため、「成績を出すのが遅い」「その後の履修状況に関わるので、暫定的に単位が出ているか出ていないかくらいは知りたかった。」といった意見が寄せられた。確かに、受講生の立場としては、成績は早く知りたいだろう。けれども、授業期間中に簡単な図書から読み始め、夏季休暇中に少し難しい課題図書を読む、というのが、本授業を設計した時点での重要なコンセプトだった。夏季休暇中の課題を取りやめ、前期中に成績を出すか否かは、本授業のコンセプトに関わる問題であり、引き続き検討が必要である。

第二は、難易度についてである。先の図2の検討からは、約半数が「ちょうどよかった」と回答していることがうかがえた。ただし、「問題点と解決策」として、「内容が難しすぎて、一部の人しか授業についていけないかった。先生たちは自分の専門分野について楽しそうに話しておられたけれど、その分野の基礎知識がない学生にはほとんどわからなかった。まずは、初歩的な説明から始めたほうがいいと思った。」という意見をよせる者もいた。授業担当者としても、一年生の前期で読むことのできる学術書を探すのは、骨の折れる作業である。また、授業担当者の専門分野によっても差異が大きいと考えられる。この点も引き続き、精査する必要があるだろう。

第三は、図書館に所蔵される本の冊数についてである。「課題図書の種類が人数に対して少ない気がした。課題図書発表時、比較的読みやすそうなのが煙のように図書館から消失していた。」という意見があった。本授業を設計した時点では、「書物との出会い」という授業のコンセプトに沿って、受講生が自費で図書を購入することも重要と考えていた。しかし、予算措置されたことで、課題図書への指定(6冊ずつ、図書館に配架)が可能となったため、受講生の負担を配慮して「自費による購入」に拘らず課題図書を利用することにした。その結果、図書が不足する、という新たな課題が生じることになった。この点については、これまでの経緯と授業のコンセプトを受講生に伝えながら、少しずつ所蔵される書籍を増やすよう対応を図りたいと考えている。

2-8. 小括

以上、過去に「書物との出会い」を受講した学生を対象としたアンケート調査の結果から、授業の満足度、授業の難易度、授業の影響、授業の継続に対する意見、問題点と解決策、の5点を確認してきた。この結果からは、本授業が受講生にとって印象に残る授業だったことがうかがえた。自由記述では、「2年も前の授業で内容を覚えているのは、それがよほ

ど印象に残ったと見えるので、自分にある程度の影響を与えたのだと思います。」「面白いので後輩に薦めました。」「是非続けてください。」「多様な物事の見方があることに、気付かされた。」といった意見もみられた。「学問への扉」の名に恥じぬよう、受講生のその後の大学生活に活かせる授業を提供し続ける必要があるだろう。

3. 授業担当者を対象としたアンケート調査の結果

3-1. 調査の方法

これまでに「書物との出会い」を担当したことのある教員の意識を確認するため、アンケート調査を実施した。アンケートは、Google フォームを用いて作成し、E-mail アドレス宛に、回答用 URL を送付した。調査期間は、2019 年の 9 月 30 日から 10 月 11 日である。2016 年度から 2019 年度の間に、「近代ヨーロッパと現代」「男と女」「視ることと読むこと（映像と書物）」のいずれかの授業を担当した 20 名の教員（うち 3 名は複数の授業を担当し、それぞれの授業に対して回答を依頼）を対象として実施し、18 件の回答が得られた。

3-2. 調査協力者の属性

まず調査協力者の属性について、担当授業と所属の 2 点から確認したい。担当授業については、「近代ヨーロッパと現代」33.3%、「男と女」33.3%、「視ることと読むこと（映像と書物）」33.3%、と同じ割合になっていた。所属については、教育学部 27.8%、法学部 11.1%、経済学部 5.6%、その他学内組織（センター等）55.6%、となっており、その他学内組織（センター等）に所属している授業担当者が多いことが確認できる。

3-3. 受講生にとっての満足度

本節では、これまでに「書物との出会い」を担当したことのある教員を対象としたアンケート調査の結果から、受講生にとっての満足度、受講生にとっての難易度、受講生への影響、授業の継続に対する意見、授業を担当してよかったこと、問題点と解決策、の 6 点を報告する。なお、これらの設問は、「授業を担当してよかったこと」を除いて、受講生を対象としたアンケート調査に対応させる形で作成した。

図 5 は、担当した科目の学生満足度を問い、得られた回答を示したものである。選択肢は、「非常に満足した」から「非常に不満だった」の 5 段階を用意し、選択肢の中から 1 つを選んでもらった。この結果からは、「満足した」が 83.3%となっており、大多数を占めることが確認できた。また、同問の受講生の回答と比較すると、担当教員の方が回答にばらつきがないことがわかる。

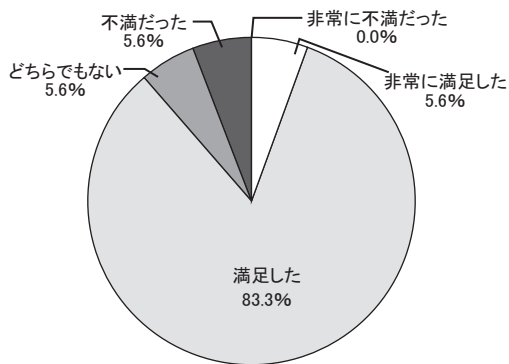


図5 受講生にとっての満足度

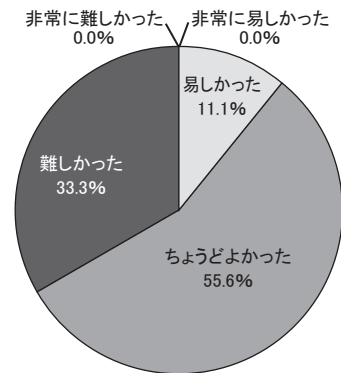


図6 受講生にとっての難易度

3-4. 受講生にとっての難易度

続く図6は、担当した科目の受講生にとっての難易度を問い、得られた回答を示したものである。選択肢は、「非常に易しかった」から「非常に難しかった」の5段階であり、選択肢の中から1つを選んでもらった。

この結果からは、「ちょうどよかった」が55.6%と最も多くなっているものの、「難しかった」も33.3%を占めることがわかる。授業を担当している教員からしても、受講生が難しいと感じていることがわかる内容が一部含まれている、ということだろうか。なお、同問の受講生の回答は、「易しかった」15.3%、「ちょうどよかった」48.2%、「難しかった」29.4%となっており、担当教員の回答と大差ない。

前節でも紹介した通り、「書物との出会い」では、「近代ヨーロッパと現代」「男と女」「視ることと読むこと（映像と書物）」各授業の難易度を分けている。この難易度の設定をどのように考えるか、本調査の結果もふまえ引き続き検討しなければならないだろう。

3-5. 受講生へ影響

図7は、担当した科目が受講生にどのような影響を及ぼしたか問い、得られた回答を示したものである。なお、項目は、受講生対象の調査を参考に、「書物に関心を持つようになった」「書店に行く機会が増えた」「書物を読むようになった」「書物の面白さを知った」「知的読書を習慣とするきっかけをつかんだ」「多様な書物を読むようになった」「影響がなかった」の7つを用意し、複数選択可として、該当する項目にチェックを入れてもらった。

この結果からは、受講生同様に、担当教員たちも「書物との出会い」の第一歩については、達成できたと感じていることがわかる。「書物に関心を持つようになった」72.2%、「書物の面白さを知った」61.1%というように、受講生を書物を読む最初の段階へと導くことができたと感じている。ただし、読書の習慣化については、担当教員も懐疑的であり、「知的読書を習慣とするきっかけをつくった」27.8%、「書物を読むようになった」11.1%というように値が低くなっている。

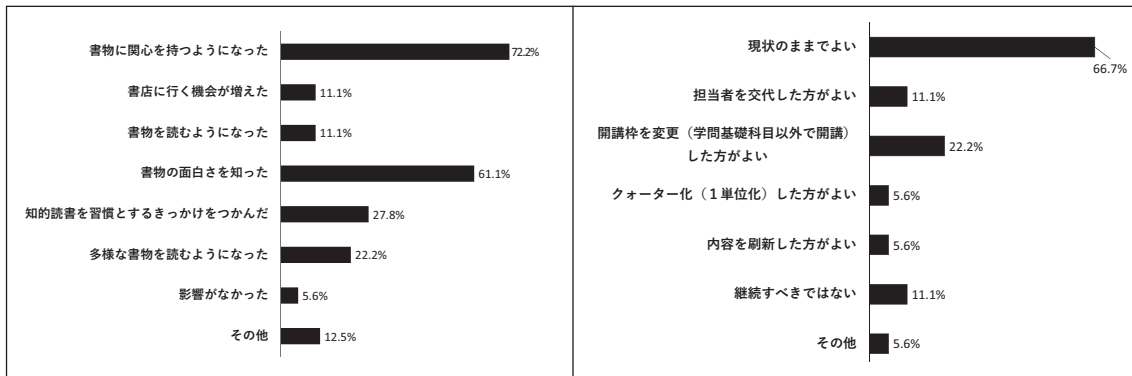


図7 受講生への影響

図8 授業の継続に対する意見

3-6. 授業の継続に対する意見

「受講生への影響」の検討からは、担当教員たちも「書物との出会い」の第一歩については達成できたと感じていること、しかし、読書の習慣化については懐疑的であることがうかがえた。では、授業の継続についてはどのような意見が得られたのか。続く、図8は授業の継続に対する意見を聞き、得られた回答を示したものである。

この結果からは、現状維持を望む声が半数を超えていることがわかる。「現状のままでよい」は66.7%となっていた。けれども、授業の改編や刷新を望む声、あるいは授業の継続を希望しない意見もみられた。それぞれ「開講枠を変更（学問基礎科目以外で開講）した方がよい」22.2%、「担当者を交代した方がよい」11.1%、「継続すべきではない」11.1%、「クォーター化（1単位化）した方がよい」5.6%、「内容を刷新した方がよい」5.6%、となっていた。

2016年の開講以降、「書物との出会い」は基本的に前年度に倣い、次年度の授業計画を組み立てていた。その方針に異論ない授業担当者が半数を超えているが、授業の改編や刷新を望み、あるいは、授業の継続を希望しない意見もあることが本調査からはうかがえた。この結果を踏まえ、今後の在り方を検討する必要がある。

3-7. 授業を担当してよかったこと

続く図9は、授業を担当してよかったことを問い、得られた回答を示したものである。項目は、「授業で新しいテーマに挑戦することができた」「薦めたい本を学生に紹介することができた」「様々な学部の学生の意見を聞くことができた」「他の教員の専門領域の話を聞くことができた」「他の教員と研究交流できた」「よかったと思うことはなかった」の6つを用意した。なお、回答は複数選択可とし、該当する項目にチェックを入れてもらった。

この結果からは、他の教員と交流できたことをよかったと感じる授業担当者が多いことがわかる。「他の教員の専門領域の話を聞くことができた」72.2%、「他の教員と研究交流できた」61.1%、という回答が得られた。

本授業は、オムニバス形式をとっており、1つのテーマについて5～6名の教員が授業を

受け持つ。そのため、例年授業開始前の12月頃には、授業担当者による勉強会を開催している。同じテーマでありながら、専門領域が異なると全く予想しないアプローチが可能である。そのことに、他の教員の授業に参観したり、勉強会に参加したりすることで気づかされる。単に授業を担当する以外の魅力が本授業に備わっていることが分かる結果である。

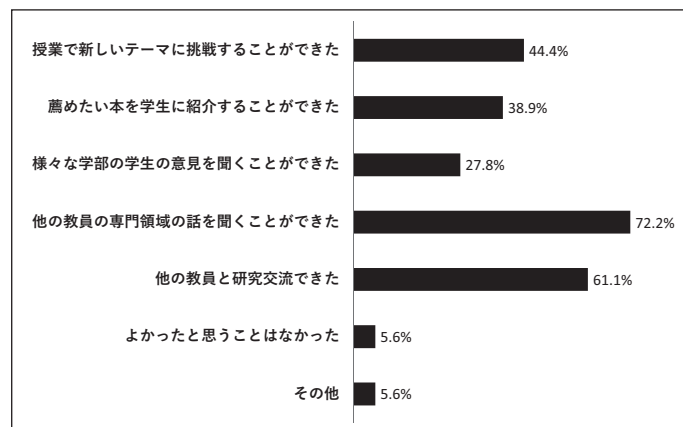


図9 授業を担当してよかったこと

3-8. 問題点と解決策

本アンケートでは、授業担当者にも、授業の問題点と解決策について、自由記述の形式で聞いている。合計5件の意見が寄せられたが、ここでは、継続的な検討が必要とされる三点について紹介する。

第一は、授業の構成についてである。「多様な話を聞くことができる点では各教員2回の授業が良いのだと思いますが、3回できれば、もう少しだけ深めることができるのではないかと思います。」というように、一人当たり2回の授業で受講生に説明できる内容の限界を指摘する意見が挙げられた。

第二は、授業の開講枠についてである。「学問基礎科目の枠組みから出して、学問基礎科目、主題科目の両方にかかわる入門的授業と位置づけるほうが良い（そのほうが、テーマ選びの自由度が上がると思われるので）」というように、学問基礎科目としての開講の限界を指摘する意見がみられた。

第三は、コーディネーターの役割についてである。「コーディネーターの役割が、特定の先生に固定されてしまう傾向がある。負担が集中しない仕組みが必要。」「書籍の選択、注文、リーディングリストの作成、事前研究会の準備、学生のレポート管理など、コーディネーターは結構やることが多い。このあたりの仕組みをもう少しシンプルにしないと、いろいろな先生がコーディネーターを引き受けてくれないように思われる。」というように、コーディネーターの仕事を簡素化する必要性が指摘された。

いずれももっともな意見である。ただし、解決が容易な問題ではない。例えば、第一の点については、授業担当が3回になれば個々の教員負担が増加する。また、第二の点については、改編にあたって各学部の卒業要件単位数の修正が必要になる。そして、第三の点

についても、新たなコーディネーターの負担増の問題が生じる。今回の調査データや挙げられた意見を参考に、今後も検討を継続していく必要がある。

3-9. 小括

以上、これまでに「書物との出会い」を担当したことのある教員を対象としたアンケート調査の結果から、受講生にとっての満足度、受講生にとっての難易度、受講生への影響、授業の継続に対する意見、授業を担当してよかったこと、問題点と解決策、の6点を確認してきた。この結果からは、本授業の現状維持を望む担当教員が半数を超えること、他の教員との交流という点において本授業の魅力を感じる担当教員が多いことなどがうかがえた。それらの肯定的な意見を励みにしながら、「問題点と解決策」で挙げた、授業の構成、授業の開講枠、コーディネーターの役割等の問題点を、引き続き検討する必要がある。

4. おわりに

最後に、学生対象の調査、教員対象の調査の双方について、いくつかコメントを付け加えておく。まず学生対象調査の結果を見ると、「書物との出会い」が学生の読書行動に一定のインパクトを与えうる授業であることが分かる。学生が書物と改めて出会うきっかけを与えられていることを素直に喜びたい。一般に授業の効果検証となると、直後の学生の反応を見るものが多いが、「後から考えると、あの授業は自分のためになった」という経験は誰にでもあるだろうから、本稿のような方法で授業の存在意義を考えてみることも重要である。今回の調査は、そういった効果検証のモデルとしても意義がある。ただしこのアンケートに答えてくれた学生が、授業のことを覚えていて、かつ Web アンケートにわざわざ回答する労を厭わない層である、ということを忘れてはならない。この点に追跡調査の難しさを見たようにも思う。

また、この層の学生が回答しているにもかかわらず、この授業が「知的読書を習慣とするきっかけ」となっていると答えた学生が、20%に満たない割合である、という結果(2-5)には、いろいろと考えさせられる。私たち教員はたった1つの授業にいろいろなことを期待するし、時にその影響力を過信している。だが教育学部の幼児教育コースを例にすると、「書物との出会い」の単位は大学生活のうちで受講する単位の141分の2を占めるにすぎない。本学のカリキュラム全体の中で、あるいは全学共通教育全体のなかで、「知的読書習慣の形成」ということをどのように位置づけていくのか、こういった広い視野のもとであらためて「書物との出会い」の意義を考えなければ、単一の授業の孤独な戦いで終わる可能性がある。

一方、教員対象の調査の結果を見ると、教員の方が、学生の満足度を高く見積もる傾向があるものの、それほどの意識の乖離はないということが言える。「書物との出会い」では、毎回のミニレポート、そのほか3回のレポート提出と、教員と学生との双方向のやり取り

が密に行われているため、教員が学生の理解度、満足度を見誤ることがない、ということではないだろうか。ただしこれは、非常に手がかかるといふことの裏返しであって、3－8で挙げられている問題と対応するものでもある。意義のある取組であることは間違いがないが、どれぐらいの労力を注ぎ込むべきなのか、ということ、引き続き考えていかなければならない。

最後に、この授業が、教員が研究をする上での知的刺激になっている点（3－7）に触れておこう。取組を広げていくためには、賛同してくれる教員を増やすことが条件となるが、参加する教員にとって得るものがある、ということ、これは継続・拡充のための重要なポイントになる。また全学共通教育において「研究と教育の融合」が果たされるという点でも——昨今のトレンドに抗する形で——今一つの初年次教育モデルを提示しているといえる。

目下、第四期中期目標・中期計画にむけて、全学共通教育の改革を検討するWGが走り出したところである。今回の調査で「書物との出会い」の意義は確認できたと思われるが、問題点もある。「検討の余地がある」といって終わりにとまらないよう、今回の調査が新カリキュラムの検討に活かされることを願っている。

謝辞

調査にご協力くださった、学生、教員の皆様に心より御礼申し上げます。

参考文献

斉藤和也・中谷博幸・佐藤慶太・西本佳代（2018）「全学共通科目「書物との出会い」の本格実施をむかえて」香川大学大学教育基盤センター編『香川大学教育研究』第15号、131-145頁。